

新 古文書から見える大東の歴史⑤ 今昔物語 第23話

江戸時代の庶民の手紙文化

江戸時代の庶民は、「読み書きそろばん」を最低限の教養として身に付けており、非常に識字率が高かったです。このため、庶民の間でもしばしば手紙のやり取りがなされていました。

手紙には、用途や時期によって使用される紙に違いがあります。重要な相手に対しては「折紙」が用いられ、略式になると横に半分に切った「切紙」が使われました。折紙は、紙を真ん中で横に二つ折りにして、折り目を下にして裏側にも文字が書かれるため、開くと文字が上下両方から書かれ状態になります。

庶民の間で一般的に使われた切紙は、江戸時代中期ごろからは糊で継いだ「奉書紙」が市販されるようになり、必要な分だけを切って使われました。さらに、後期になると絵を印刷したものなど趣向を凝らした紙も登場しました。

手紙の料紙には、「なでしこ」「薫に垣根」「蓮葉」を木版で印刷した切紙や、「藍染」「梅染」「波染」といった色のついた紙があり、



紙に「なでしこ」(右)や「薫に垣根」(左)が印刷された手紙。庶民の素朴な文化を感じられます。

庶民の手紙に対する文化的趣向を感じることができます。書かれている内容は、諸福村で泊まつた人が名所見物したことなどへのお礼や、星田辺りで松茸狩りを計画していることなどで、身近な庶民の様子を垣間見ることができます。

手紙を通して、庶民の素朴な文化を知ることができる古文書は、9月30日まで市立歴史民俗資料館で展示されています。

(市史編纂委員

岡村喜忠)

新 古文書から見る大東の歴史⑥ 今昔物語 第24話

「車いく」古堤街道

さまがわり

古堤街道は、大阪の京橋を起点として旧大和川や寝屋川の北堤防上を東に進み、河内平野を横断して奈良へ向かう主要な道路の一つです。享保21年(1736)刊行の「五畿内志」には「中垣内越」、「古堤路」と記され、江戸時代には放出來まで「古堤路」、「中垣内からは「中垣内越」、「生駒越」などと呼ばれましたが、明治になり「古堤街道」と呼ばれるようになりました。

当初は旧大和川の堤防上や新開池の北側堤防上を進み、深野池は舟で渡っていましたが、承応4年(1655)に現寝屋川筋の徳庵井路が開削されると、「徳庵堤」と呼ばれる堤防上を進み、宝永元年(1704)の大和川付け替え後は、深野池開発による深野南新田内を横断するようになり、現在に見られる古堤街道が形成されました。そして山間部の龍門地区に入ると、四條畷市下田原で奈良方面に向かう清瀬街道に合流する「北ルート」と、現在は残つていませんが生駒方面に向かう「南ルート」に分歧していました。

市域での特徴としては、西部では周辺より約2倍程度高く、堤防

上の道であつたことをよく示していることや、寝屋川と恩智川が合流する住道では、「角堂浜」と呼ばれる船着場と交差していたことから、水・陸両交通が交差する地として、住道の発展に大いに寄与したこと、また東部では落ち着いた昔ながらの街道の雰囲気が残されています。

現在では阪奈道路が主要道路となつたことから、その役割を終え様変わりしましたが、当初は寝屋川の舟運と共に大東市の発展には欠かせない重要な道路であったと言えます。

(生涯学習課)



段蔵が残る古堤街道(諸福3丁目)